

「グラスルーツ岩手アカデミー2016」開催報告

国際地域女性アカデミー in Tohoku 2016-2019
International Grassroots Women's Academy in Tohoku 2016-2019

グラスルーツ東北アカデミーは、東北3県（宮城、岩手、福島）の次世代を担う女性たちが集い、他者から学び、自分の経験を他者への貢献とし、みずからの成長につなげる場です。2015年3月の国連防災世界会議のプレイベントとして東北3県40名、アジア、中南米など世界10カ国から15名の女性リーダーの為に国際研修を国際NGOホワイロウ・コミッションと南三陸町で開催したのを機にスタートしました。



アカデミーの3本柱

- 1) 参加者が主導する地域活動の視察
- 2) お互いの活動紹介で、より深く経験をまなび合う
- 3) 女性リーダーの大先輩から個人の経験をきき対話する



2016年2月12日、13日

参加者：岩手12名、宮城3名、福島4名、子ども2名、講師・スタッフ11名

【主催】(特非)ウィメンズアイ

【助成】みやぎ地域復興支援助成金、Fish Family 財団

【協力】米国地質調査所 (USGS)、ロクシタン・ジャパン、若希スティール (東京大学社会科学研究所)、いわて連携復興センター、通訳：光永奏者

1日目 2月12日(金) 岩手県住田町視察

ランチでの自己紹介ののち、役場新庁舎の町民ホールに会場を移してプログラムがスタート。

◆WE 石本よりアカデミーの概要説明後、ロクシタン・ジャパン中原様よりご挨拶。

◆事例紹介 岩手参加者の3名による発表。会場からも活発に質問、意見が飛び交う。

▶住田町役場企画財政課課長補佐 横澤則子さん

震災直後の状況と役場の対応、その後の役場とNPOの連携について。

→国内でも先進事例と言える取組に一同ため息も。NPO活用、外の人との連携の空気が役場に醸成されているのはなぜか？ 地域内異団体交流で多様な人を巻き込む仕掛けは？ 縦割りになりがちな役場の方と協力しあう秘訣は？ などの質問。自発的活動の歴史がある町。民間活用の必要性は身にしみている。自分は女性であるという異質さを強みに横断的な場所に入って行けた、政策構築の段階から、地域づくりの具体的なイメージできるようになってきた。異質な人を活かすといふ。近づきたいビジョンと、年代層が上の方々のすり合わせが大事、など。

▶住田町役場集落支援員 佐々木淳代さん

盛岡出身。「住田をつなぐ」を合い言葉に、町内5人の若者で(一社)SUMICA立ち上げ。町の活性化、将来、未来の子どもに関わる事業。つながりづくりイベント、運営企画。町内で子どもが本物のカルチャーを体験し、住田ってか



っこいいと思ってほしい。母屋と5つの蔵を持つ名家をリノベーションした住民交流拠点施設の指定管理を3年間持つことになった。コミュニティカフェ、女性が働くレストラン、宿泊所、子どもと行ける場所。みなさんの意見欲しい。

→会場内から、共感の声多数。20～30代の女性が継続して住める町が大事。子どもを連れて行く施設にあってほしいものの提案。一方、保守的な地域でどうしても取り組みに理解を得られるのか質問。大きな解決策はない、心に訴えかけ足で稼ぐ。折れそうな時、SNSでつながっているアカデミーの人ありがたかった。



▶NPO法人 wiz 佐々木里奈さん

全員、震災後の岩手県Uターン者。若手のネットワークで岩手を盛り上げる。“岩手に住む”を選択肢にする。今あるUIターン促進事業、さらに嫁ターン、婿ターン事業やりたい。どういう人たちがどう交流したらいい？

→婚活イベント、「婚」がつくといい。一緒にやるアクティビティ、要素×要素、地域のことを知る。その他、バツイチも行きやすいもの、対人苦手層で集まる等思い切ったもの、など提案。Uターンして居場所がないという声も聞くが2人はどうか。誰でも入ってOKという復興関係のコミュニ

ティがある、外の空気があるところの方がやりやすい（里奈）。Uターンしてよかったと思えるようなフィールドを自分で作っている（淳代）。

▶講師陣からのコメント

若希ステール氏→視点・価値観を共有していない相手を想像すること重要。

田島誠氏→ソーシャルキャピタルの重要性。場の提供に終わらず、場からの創業に期待。

ルーシー・ジョーンズ博士→ひどい災害の後に生み出されたポジティブな状況を聞いて感激。人のつながりを感じる、これは本当に強み。

2日目 2月13日(土)陸前高田 箱根山テラス

◆午前のプログラム：ブーストーク～活動紹介

室内に5つのブースをつくり各自の活動紹介と意見交換。参加者は自由にブースをめぐる。3クールで全員が紹介。



参加者の声、話題→人を集める企画の工夫／福島、女子たちと重い課題どう話すか／まちづくり？人づくり／連携の具体的工夫／世代でのジェンダー感覚の差／子どもを生み育てること／震災直後の医療体制 etc.



◆ランチタイム

この日ちょうど誕生日を迎えたルーシー・ジョーンズ博士にサプライズのケーキを！



◆午後のプログラム1：世界の防災事情



国際協力 NGO センター 防災アドバイザー田島誠氏に、昨年の国連防災世界会議での仙台防災枠組以後の日本、世界の防災の動きについてレクチャーいただく。「レジリエ

ス」「ビルド・バック・ベター」などの用語の意味、参加者同士で再確認。

◆ 午後のプログラム 2

ルーシー・ジョーンズ博士との対話



Lucy Jones 博士は米国の著名な地震学者。米国政府機関の自然災害リスク軽減の科学顧問。女性科学者のパイオニアとして道を拓いてきた人生について語った。女の子は数学などしなくてよいと言われた時代、父に励まされ、よき師に巡り会い、当時では先進的な考えを持っていた夫が支えてくれた。1992年のロスアンジェルスでの地震直後にベビーシッターを見つける間もなく赤ん坊を抱えながらテレビで地震解説を行い、全米で一躍有名に。科学者の世界では軽視される市民教育だが、予測不能な地震、その科学をわかる言葉で伝え、防災につなげることに仕事をシフトしてきた。本当に大事なものは奥底の自分を探り、それをみつめて行動すること。自分を信じること。良い仲間をつくること。家族写真もまじえ、こうしたプライベートな話をするのは初めてだという。

福島の参加者たちから、見解の違う科学者達の対立から生まれた不安について語られた。博士は、あなたがたは災害の課題で一番難しいものに立ち向かっているとコメント。社会がどのように科学データを活用するか。リスクコミュニケーションを育む教育、市民の科学リテラシーを高めて行く必要性について意見を交換。

博士は今後、南カリフォルニアのコミュニティのレジリエンスを高める活動に踏み出す。LAでのアカデミーに向け、交流を続けようと締めくくった。

博士は今後、南カリフォルニアのコミュニティのレジリエンスを高める活動に踏み出す。LAでのアカデミーに向け、交流を続けようと締めくくった。



今後のアカデミーは8月福島、2月シアトル、その後宮城、岩手、LAにて開催予定。